びんの中の世界

小川未明

青空文庫

正坊のおじいさんは、有名な船乗りでした。年をとって、もはや、航海をすることができなくなってからは、家にいて、ぼんやりと若い時分のことなどをおもい出して、暮らしていられました。

おじいさんは、しまいには、もうろくをされたようです。すくなくも、みんなには、そう思われたのでした。なぜなら、海の中から拾ってきたような、朽ちかかった一枚の黒い板をたいせつにして、いつまでもそれを大事にして持っていられたからです。

また、おじいさんは、家の前に立って、あちらの山のいただきをながめながら、

「まだ、こないかいな。」といわれました。

みんなは、それを不思議に思ったのです。

「おじいさん、だれがくるのですか?」と、家の人が聞きますと、「海から、私を迎えにこなければならぬはずじゃ。」と、おじいさんは、答えられました。

おじいさんが、とうとう亡くなられてしまってから、おばあさんは、正坊に、よくおじいさんの話をして聞かせました。

「おまえのおじいさんは、有名な船乗りだった。しかし、年を取られてから、もうろくをなさって、毎日、あちらの山の方を見て、海から、だれか呼びにくるはずじゃといっていられた……。」

正坊は、おじいさんの話を聞くたびに、なんとなく不思議な感じがしたのです。そして、そのことを、まったくもうろくからの言葉ばかりでないというような気がしたのでした。

それで、正坊は、やはり、家の前に立って、あちらの山をながめていました。青い空の下に山の線が、すその方へなだらかに流れている。夜になると、山の上には、さびしく星が輝いたのである。春から、夏にかけて、その山は紫に見えました。そして、冬になると、山は真っ白になりました。

「雪が、あのように積もっては、どんな男も山を越してくることはできぬだろう。……しかし、その勇士は、また非凡な術で、雪の上を渡ってこないともかぎらない。」と、冬の晩方など、正坊は、外に立ってながめていたこともありました。

おばあさんは、古くから家にあるのだといって、あめ色のガラスびんを大事にして、たなの上に飾っておかれました。雪の降るころ、南天の実が赤くなると、おばあさんは切ってきて、そのびんにさして仏さまにあげました。また、春になると、つばきの枝などを折ってきて、びんにさして、やはり仏壇の前に供えられたのです。

正坊は、なんとなく、そのびんがほしくてなりませんでした。

「おばあさん、あのびんを僕におくれよ。」とねだった。

おばあさんは、なかなか正坊のいうことを聞かれなかった。

「あのびんは、昔から家にあるびんだから、おもちゃにして壊すといけない。」といわれた。

そう聞くと、正坊は、ますますそのびんが欲しくなりました。

昔、酒かなにかはいって、渡ってきたらしくもあれば、また、おじいさんが、船乗りをしていなさる時分、どこかで手にいれたものらしくも思われました。

ある日、正坊は、こっそりと、おばあさんに気づかれぬように、たなの上からびんを取り下ろして、外へ持って出ました。そして、びんの口に目を当て、太陽の方に向かって仰ぎました。すると、一人の男が、馬にまたがって、遠い地平線から駈けてくるのが見えま

す。正坊は、あわてて目を放して、向こうを見ると、どこにもそんな影らしいものはなかった。正坊は、このとき、そのびんを魔法のびんだと知ったのでした。そして、このことをおばあさんに話すと、「ばか、なにをいう。」といって、おばあさんは取り上げられませんでした。

正坊は、亡くなられたおじいさんが、待っていられた使いというのは、このびんの中に見える馬に乗った男のことでないかと考えました。もうろくされたおじいさんは、このびんの中に見える男が、いつか、あの山を越えてくるのだと思われたのであろう、と考えました。

しかし、不思議なことは、二度めに、正坊がびんの口に目をつけて、空を見たときには、馬に乗った男の影が見えずに、赤い花の咲いた野原に、はるかに、町の姿が小さくなって見えたことです。

三度めに、彼が、そのびんからのぞいて、かなたを見たときには、前に見たような景色は見えなくて、茫々とした海原の中を、ただ一そうの船がゆく影が見えたのでした。そして、この三つの場面が、びんの口をのぞくたびに、そのときどきに入れ変わって見えるだけであって、他の景色は見えなかったのであります。ある日のこと、「そう、そのびんを外へ持って出て、いつか壊すといけない。」と、おばあさんがいわれたのを、正坊は、わざと聞かぬふうをして外へ持って出ました。

彼は、往来の上に立って、それをのぞきながら、友だちがやってきたら友だちにものぞかせて自慢をしてやろうと思っていました。

このときどこからか、一人の男が、ほんとうに馬に乗ってやってきました。そして正坊を見ると、ふいに、馬を止めました。

「ちょっとそのびんをお見せ。」といって、男はびんを取り上げて、口に目を当ててのぞきました。

「まことに珍しいびんだ。私は、このびんを探していたのだ。坊は、私といっしょにこないか?」と、馬に乗っている男はいいました。

正坊は、かねて、おばあさんから、おじいさんの話を聞いていました。「おじいさんは、山を越して、だれか、きっと迎えにくるといって待っていられたそうだ。それは、けっして、もうろくなされたから、そんなことをおっしゃられたのでなかろう。その男というのは、きっと、この人にちがいない……。」と、正坊は心の中で思いました。

「おじさんは、どこからこられたのですか?」と、正坊は、たずねました。

「海からきた。」と、馬に乗っている人は答えた。

それで、正坊は、まさしくこの人だと思いましたから、その男のすすめるままに、いってみようと、即座に決心しました。

男は、自分の脇に正坊を乗せて、馬にむちを当てました。その馬の脚は速かったのです。森や、川や、丘を過ぎてゆくと、いろいろの美しい花の咲いた野原に出ました。はるか、あちらを見ると、町の屋根が地平線に浮き上がって見えたのです。

「あ、いつかびんの口から、のぞいて見た景色だ!」と、正坊は、思いました。

「おじさん、どこへゆくの……。」と、正坊はたずねた。

「あの町へゆくのだ。」と、男は、答えました。

やがて町へはいろうとすると、建物の間から、青黒い海が見えました。

町へはいって、しばらく走ると、馬は、ひさしの深く差し出た、昔ふうの家の前へきて止まりました。男は馬から降りて、内へ向かって声をかけました。すると脊の低い老人が、腰を曲げて出てきました。

「お父さん、ようやく、あなたが、もう一度見たいとおっしゃられたびんを持ってきました。これでございましょう……。」

老人は、歯の抜けた口をもぐもぐさしていましたが、細い、しわだらけの手を出して、びんを受け取りました。そして、びんのまわりをなでまわしていましたが、その口に目をあてて正坊がするように、太陽に向かって仰いだのです。

「あ、これ、これ、これにちがいない！」と、老人はうれしそうにわめきました。

「私は、やっと、このびんにめぐりあった。もはや、一生のうちに、めぐりあわないかと思っていた。しかし、おまえのおじいさんは、死になされたとみえる……。」

老人は、びんを持って、暗い家の内へはいりました。しばらくたつと老人は、びんの中へ、ほんとうにわずかばかりの油をいれて二人の前へあらわれました。

「永年しまっておいた油は、もうこればかしになってしまった。もうすこし長く月日がたったら、油は、一滴もなくなってしまっただろう……。

私が、海の上で生活をしていた時分、兄弟の約束をした仲間があった。二人は、たがいに助けつ、助けられつした。そして、別れる時分に、二人は、もう一度たずね合ってあいたいというまじないから、インドの魔法使いからもらったびんと中身の油とを別々に持って帰った。こうすれば、いつか、びんと油は、かならずめぐりあうといった魔法使いの言葉を信じたのだ。子供！　おまえのおじいさんは、黒い板を持っていなされたろう……。この油をともして、その板を見るがよい……。」といって、油のはいったびんを正坊に渡したのでした。

正坊は、この町と、このおじいさんと、この家をよくおぼえておこうと熱心にながめていました。

男は、ふたたび、正坊を馬に乗せてくれました。そして自分も乗り、馬にむちを当てると、馬はきた時分の道を走り出しました。日は、いつしか海に沈んで、野原に咲いている赤い花も黒ずんで見えたのであります。そして、月が大空に上がり、その下を流れている川の水が、一筋の銀の棒を置いたように、白く光って見えたのでした。

二人を乗せた馬は、村の往来までくると止まりました。そこからは、もう、正坊のお家がじきだったのです。

「さあ、もうここからなら、ひとりで帰れるだろう。」といって、男は、正坊を馬の脊から下ろしてくれました。

「おじさん、あの町は、なんというの？」と、正坊は、振り返って問いました。

「……」と、男は、いい残して、馬にむちをあてて去りました。

正坊は、男のいった言葉が、よく、はっきりと耳にはいらなかった。そのうちに、ひづめの音は遠ざかり、影は、月の明かりに、だんだん小さくかすんだのです。

おばあさんは、門から出たり、入ったりして、正坊を探していられた。そこへ、正坊は帰って、その日のできごとの話をすると、お

ばあさんは、頭を振って、

「ばか、なにをいう。きっと、おまえは、きつねにでもばかされたのだろう……。」といわれました。

正坊は、町の名を聞きもらしたのが残念でした。おそらくそのことは、永久に、彼にとって残念であったにちがいない。なぜなら子供の頭で、いつまでも、町をおぼえていることは不可能であったから……。

しかし、それが夢でないことは、びんの中に油がはいっていたことでした。すぐに、土器にうつして、火をつけて、正坊は、おばあさんと二人で、黒い板を見ました——。

異様な、帆船の姿が、ありありと板の面に見えたかと思うと、また、その姿は、煙のごとく、しだいにうすれて消えてしまった。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　5」講談社
　　1977（昭和52）年3月10日第1刷
底本の親本：「未明童話集2」丸善
　　1927（昭和2）年9月20日発行
初出：「赤い鳥」
　　1927（昭和2）年1月号
※表題は底本では、「びんの中《なか》の世界《せかい》」となっています。
※初出時の表題は「壜の中の世界」です。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：へくしん
2020年3月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

びんの中の世界

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/